

論文

知的障害児の音楽鑑賞の指導における教材と提示方法

齋藤 一雄*・渡邊 紗彩**・長谷川 徹***

特別支援学校の音楽の授業において、知的障害児を対象にDVDを活用し、視覚教材や打楽器演奏等を加えた音楽鑑賞の指導を行い、対象児の反応を分析し、教材や教材の提示方法について検討した。対象は、A県立B特別支援学校中学部重複学級2組に在籍する生徒2名である。教材は、チャイコフスキー作曲「白鳥の湖」より“4羽の白鳥の踊り”、同「くるみ割り人形」より“金平糖の踊り”、プロコフィエフ作曲「ロミオとジュリエット」より“騎士たちの踊り”で、バレエをDVDによって演技と音楽と一緒に鑑賞した。どれも集中して聴いていた。アニメと歌による「みんなのうた」“赤鬼と青鬼のタンゴ”“フニクリ・フニクラ”“大きな古時計”は、よく知っている曲なので、集中して聴くことができていた。絵カードやウッドブロックの演奏なども加えたが、振ったりたたいたり、積極的な反応がみられた。

キーワード：音楽鑑賞 教材 提示方法

I 問題と目的

小学校音楽科の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」とあり、内容に関しては、「A表現」では歌唱、器楽、音楽づくりの活動の指導内容と表現教材として取り扱う教材、「B鑑賞」では鑑賞の活動の指導内容と鑑賞教材として取り扱う教材が示されている（文部科学省，2008）。さらに、共通事項として、音楽を形づくっている要素（音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズなどや音楽の仕組み）を聴き取り、そのよさやおもしろさ、美しさを感じ取ることと音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について理解することがあげられている。

そのなかで、近年、鑑賞教育が重視されているが、鑑賞の授業においては、子どもが音楽を聴こうとすることが必要であり、音楽を聴きたくなる環境をどう作っていくかが重要となる。しかし、どのように鑑賞の指導を行ったらよいのか、児童生徒がどのように鑑賞活動を行っているのか、どのように児童生徒の反応を見取るのか、評価をどのようにしたらよいのか、むずかしい課題があげられている（高須，2009）。

子どもは音楽を聴いて、その楽曲が醸し出している雰囲気や気分、感情、表情などの曲想を感じ取るわけであるが、その曲想は音楽の仕組みや構成、音色、リズム、速度、強弱、旋律などの要素が絡み合っ一つの構造として成り立っている。そして、「楽曲の構造を子どもがその発達や学習の状況に応じて解き明かしていくことは可能」と高須（2009）は述べている。

一方、神原（2007）は音楽鑑賞に動きを導入した実践を提唱している。「理解力や技能の違いのある者同士と一緒に活動するとき、そこでは誰でもがもてるスキルで参加することがポイ

ントとなります。子どもたち（学習者）がいま備えている能力を駆使すること」が重要だとし、たとえば、手を上げたり下げたり、身体を左右に揺すったり、誰にでもできる動きを伴いながら音楽を聴くことを薦めている。

しかし、障害のある子どもの場合、音や音楽の楽しみ方は個々の実態によってまちまちであり、その表現の仕方も幅広いものとなる。また、知的障害のある子どもにおいては、音楽を聴いたり表現したりしたときに、どのように聴いたか、どのように考えて表現したかについて、ことばや文字などで表現することに困難を伴うことが多い。それゆえに、一人一人の子どもの様子や表情の変化を細かく捉え、その子どもにあった教材や指導法を工夫することが必要である。

知的障害特別支援学校における音楽鑑賞の目標は、「好きな音楽を聴いて楽しむ」「身近な人の歌や演奏などを聴き、いろいろな音楽に関心を持つ」である（文部科学省，2009）。「おんがく☆おんがく☆おんがく☆☆教科書解説」には鑑賞の指導上の留意点として、教師の歌や楽器の演奏といった生の演奏を聴く、複数の感覚を同時に活用して音や音楽を聴く、今まで接することがなかった音楽と出会い、楽しさや喜びを感じる、表現活動を伴う活動を十分に楽しむ、リズムの変化や音の強弱などのおもしろさに気付いたり聞き取る能力を身につける、リズムに加えて旋律の美しさに注目し、音楽を全体的に味わって聴こうとする気持ちを育てる、映像とともに鑑賞するなど、児童がイメージを喚起できるようにする、生活の中で進んで音楽を鑑賞しようとする意欲を育てる、友だちの演奏を聴き、鑑賞態度を身に付ける、互いの演奏の良さを認め合い、表現に生かすことなどがあげられている（文部科学省，2011）。

また、障害のある子どもの音楽鑑賞の指導では、環境音楽的に音楽を用いるよりも、直接的に興味・関心や注意を喚起しやすいような音楽を用いる方が、より確実な教育的効果が得られる可能性があるといわれている（前・緒方，2007）。また、小原（2009）は、音に興味を見いだせない障害のある子どもに対

* 元上越教育大学

** 聖坂養護学校

*** 新潟県立上越特別支援学校

して、「動き等の様々な要素との組み合わせによって、児童が集中したり、聴くことができる」「『みる・きく』ことができたことでそれがイメージをもつきっかけとなり、さらなる興味関心・意欲へと繋がる」と述べている。

そこで、知的障害児を対象に、音楽の授業のなかに音楽鑑賞の時間を設定し、「おんがく☆おんがく☆☆おんがく☆☆☆教科書解説」（文部科学省，2011）を参考に、対象の子どもの実態やこれまでの音楽とのかかわり、興味・関心などをもとに教材選択を行い、音楽鑑賞の指導を行った。その際に、教材選択や子どもの反応に関する分析を深めるために、音楽担当の教員から聞き取りを行うことにした。また、知的障害児を対象にした音楽鑑賞の指導上の留意点から、聴覚的な鑑賞だけでなく視覚的な映像を含めた鑑賞が、より興味・関心をもって鑑賞できる可能性が指摘できることから、動きのある映像を含むDVDを用いること、また、物を振ったり叩いたりする動きを組み合わせること、教師の生の演奏を聴きながら打楽器の演奏を行うことにした。このような音楽鑑賞の教材の提示方法は、特別支援学校における音楽鑑賞の指導において、容易に活用可能であるために、実践を報告する意義は高いと考えた。

II 方法

1 対象の生徒

対象は、A県立B特別支援学校中学部重複学級2組に在籍する生徒(2年生C1、3年生C2)2名である。

C1は、B特別支援学校に小学部から入学し、現在中学部2年生の女子である。知的障害、自閉症の診断があり、てんかんもあるので服薬中である。始歩が遅く、現在もよろけやすく、まっすぐ歩くことが苦手である。また、興味のあるものには衝動的に突進したり、目に入った絵や文字など興味のあるものにとらわれてしまい、その状態から抜け出すことができなくなってしまう。発語はないが、50音表を指さすことによって、単語で要求を伝えることができる。教師からの簡単な言語指示は理解でき、行動に移すことができる。

音楽は好きで、音楽の種類によって異なるが、両手をたいて飛び跳ねることがみられる。反射的に飛び跳ねることもあり、

そのみとりがむずかしいときもある。

C2は、B特別支援学校に小学部から入学し、現在中学部3年生の女子である。知的障害、てんかんの診断があり、現在、服薬中である。始歩が遅く、5歳3ヶ月であった。また、おむつをしている。手でものをつかむ力は強く、特にうれしいときと不安を感じたときにものを強く握って離さない。発声はあり、いろいろな音声を発することができるが、嫌いな活動や苦しい活動から逃れたいときには「あした」、バイバイは「ガイガイ」、寄宿舎は「シャッ」、おしっこは「シー」、うれしいや楽しいときは「ターシー」「ウーシー」などが出ている。絵カードの2択などによって、要求を確認することができるときもある。

音楽は好きで、歌うこともあるが、他の人と一緒には歌わない。突然思い出して一人で歌い出すこともある。好きな歌は、「星に願いを」（カカカカカと歌う）、「きらきら星」（キカキカキカ）などである。また、10分ぐらいかかる曲でも静かに聴いている。

2 対象の場面

B特別支援学校中学部重複学級2組では、IV類型（自立活動を主とした教育課程）の学習を行っている。「うた・リズム」（金曜日3限、10:40～11:20）の授業では、①器楽演奏、②手遊び、③身体表現、④鑑賞、⑤歌唱と、同じ教材を繰り返し、ほぼ同じ順で活動している。

中心となって指導を進める教師（Main Teacher、以下MTとする）と担任2名（Sub Teacher、以下STとする）と一緒に指導を進めている。MTは、大学で声楽を学び、特別支援学校での教職経験も長く、知的障害児教育、肢体不自由児教育に造詣が深い。

「うた・リズム」は「音楽室」で行い、生徒は自分の教室から移動してくる。音楽室でのピアノ、音響機器、楽器、生徒などの配置は図1のとおりである。

研究対象の活動は④鑑賞である。B特別支援学校中学部重複学級2組の「うた・リズム」における音楽鑑賞のねらいは、「いろいろな音楽に接する機会とする」「知っている音楽を増やす機会とする」「生演奏を聴く機会とする」の3点である。この場面のみ、MTと相談しながら、研究者が中心になって授業を

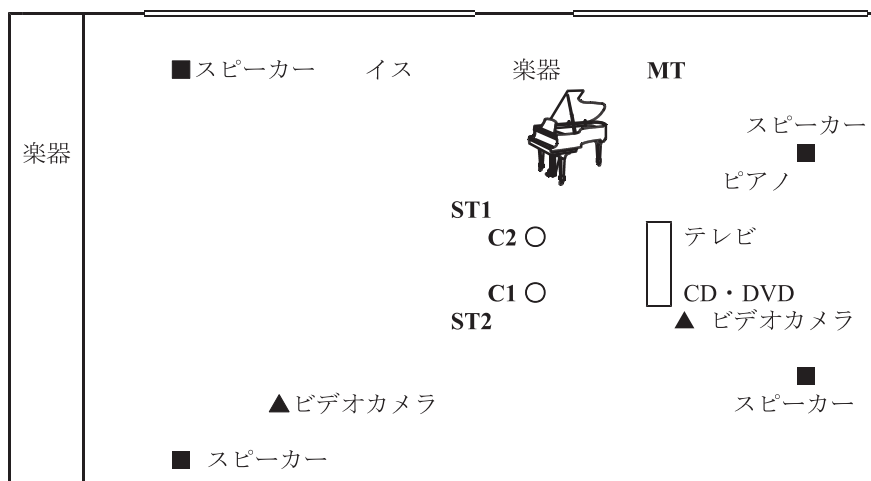


図1 「音楽室」の配置図

表1 分析対象とした教材一覧

月/日	鑑賞教材	使用した機器等
9/11	チャイコフスキー／バレエ「白鳥の湖」から“4羽の白鳥の踊り” (第2幕、ハ長調、4分の3拍子、1分27秒) 「みんなの歌」より“赤鬼と青鬼のタンゴ” (作詞加藤直、作曲福田和禾子、ハ長調、4分の4拍子、2分12秒)	DVD 写真 DVD 絵カード
9/18	プロコフィエフ／バレエ「ロミオとジュリエット」から“騎士の踊り” (第1幕、ホ短調、4分の4拍子、1分51秒) 「みんなの歌」より“フニクリフニクラ” (作詞ジュゼッペ・トゥルコ、訳詞青木爽・清野協、作曲ルイーダ・デンツァ、ハ長調、8分の6拍子、2分2秒 鬼のはいているパンツが丈夫であることを歌った「鬼のパンツ」という替え歌もある)	DVD 写真 DVD 絵カード
9/25	チャイコフスキー／バレエ「くるみ割り人形」から“金平糖の踊り” (第2幕、ホ短調、4分の2拍子、2分25秒) 「みんなの歌」より“大きな古時計” (作詞作曲ヘンリー・クレイ・ワーク、訳詞保富康午、ト長調、4分の4拍子、2分37秒) “大きな古時計” リコーダー演奏とウッドブロック (2分8秒)	DVD 写真 DVD 絵カード ウッドブロック

進めた。

3 鑑賞で使用する楽曲と提示方法

鑑賞で使用する楽曲は、音楽の教科書(☆本含む)を参考に、対象生徒の実態やこれまでの音楽とのかかわり、興味・関心などを音楽担当教員から聞き取り、1回の授業で基本的には短い楽曲を2曲選定した。選定する際に、いろいろな音楽を聴く機会となるように、また、生徒の知っている楽曲や興味・関心のもちやすい楽曲を選曲するようにした。そして、2曲の内、1曲はクラシック音楽から、もう1曲は生徒の好みの楽曲(アニメやCMで使用されている曲等)を選曲した。

鑑賞教材は、音楽と動きのあるバレエのDVD、歌とアニメーションが組み合わさったDVD、教師による生演奏によって提示し、絵カード(ペープサート)や打楽器によって反応する場面を設定した。

4 記録と分析方法

週1回の授業をビデオカメラで録画し、対象生徒の発声や動作、表情等を記録し、带状の図(図2~8)を作成した。また、音楽担当の教員から対象生徒の反応について聞き取りを行い、対象生徒の反応の分析と解釈を行った。分析は、20XX年9月に行った3回を対象とした(表1)。

5 倫理的配慮

学校長に研究の趣旨を説明し、同意を得た。生徒の保護者には、担任教師より説明し、同意を得た。上越教育大学研究倫理調査委員会(26-64)の承認を受けた。

III 結果

1 教師の働きかけと反応

1) バレエ“4羽の白鳥の踊り”

(1) C1の反応

映像が始まる直前は、手を叩いたり、足を動かしたりしていたが、映像が始まると視線を映像に向けた。曲の途中で両足を左右に振っていたが、その後、STを呼び、文字カードで「へばりぜ」と指差した(図2)。

(2) C2の反応

目や口を横にはり、服の裾を両手で触り、映像を見続けた。曲の後半、両手を膝につき、身体を前に乗り出すようにしてやや下方を見て、笑みを浮かべる。そして、再度服の裾を触り始めた。曲の最後の和音で映像に視線を向けた(図2)。

2) バレエ“騎士たちの踊り”

(1) C1の反応

始まる前は、両手を膝に置き、静かに映像を見ている。曲が始まると、両手を頭上にあげ、頭の後ろを掻いたり、髪を触ったりした。場面が変わるところで近くにいるSTを呼び、文字カードを見せ、指で文字を指した。STは「スイートプリキュア」と読んだ。その後、手を叩いたり、動かしたりした。最後はよく見ていた(図3)。

(2) C2の反応

始まる前は、右方を見たり、両腕を組んだり、左方を見たり、窓の外を見たりしていた。音楽が始まると、リズムに合わせて左手を小さく上下に数回振った。終始笑いをこらえているよう

な表情をしていた。口をもぐもぐ動かしてもいた。映像の中で、騎士たちと女性たちが一緒に踊る場面で、両手を口に当て、「シャー」と言って両手を左右に広げるポーズをみせた。曲の冒頭に戻ると、両手でシャツの裾をもみながら見ていた(図3)。

3) バレエ“金平糖の踊り”

(1) C1の反応

この日は体調を崩し、車イスに乗っていた。提示した写真を見ていたが、曲が始まると前傾姿勢を取ったり、左方を向いたりしたが、映像に視線が向くときもあった。その後も、左方、左下、左方、映像、右下、映像と視線を動かしていた。文字カードによる意思の表出はみられなかった(図4)。

(2) C2の反応

服の裾を触りながら映像を見続けた。途中で、上、左下と視線が動き、再び映像に視線が向けられ、最後まで見続けた。発声はみられなかった(図4)。

4) “赤鬼と青鬼のタンゴ”

(1) C1の反応

映像が始まると視線を映像に向けた。途中、絵カードを回したり、右手で叩いたり、持ち上げたりした(図5)。

(2) C2の反応

絵カードを手でクルクル回しながら、視線を映像に向けた。2番の歌詞で後方にいる教育実習生の方を振り返り、リズムに合わせて右手で絵カードを回した。その後、歌詞の「ツノツノ」のリズムに合わせて左手に持ったカードを上下に2回振った。最後の場面で、左手に持ったカードを上下に2回振った(図5)。

5) “フニクリ・フニクラ”

(1) C1の反応

静かに映像を見続けた。2番の歌詞とともに、近くにいるSTと呼び、文字カードの文字を指で指した。STは「おのぼんつ」と読んだ。その後、両手で頭の後ろを掻き、両手をその

まま頭の後ろに置いた。曲が終わると、両手を下ろし、その後、両手両足を動かしていた(図6)。

(2) C2の反応

手渡された絵カードの柄を両手で挟んで回しながら、映像を見続けた。「みんなをノ」の部分で絵カードをリズムに合わせて上下に2回振った。2番の歌詞で絵カードをリズムに合わせて左右に3回振った。その後、絵カードをクルクル回しながら、右を向いたり、下を向いたりしていた(図6)。

6) “大きな古時計”

(1) C1の反応

絵カードを両手で持ち、静かに映像を見続けた。2番の歌詞の「うれしいこともかなしいことも～」から最後まで、手を叩いたり、腕を大きく広げたり、足をバタバタと不規則に動かしたりした(図7)。

(2) C2の反応

始まる前は、下を向き、絵カードを持ってクルクルと回していたが、始まると映像を見ながら、絵カードを持ってクルクルと回した。1番の最後の歌詞「その時計～」の部分で、絵カードをリズムに合わせて左右に振った。その後、絵カードをクルクル回し、背が丸くなっていった。3番の最後の歌詞の「その時計～」の部分で顔を上げ、絵カードをリズムに合わせて上下に振り、最後に左手で左上へ絵カードを振り上げた(図7)。

7) 生演奏による“大きな古時計”

STと生徒はウッドブロックを叩き続けた。研究者は最初にソプラノリコーダーで旋律を演奏し、次にアルトリコーダーで伴奏旋律を演奏した。

(1) C1の反応

最初、右手でブロック、左手でバチを持っていたが、開始の時にSTが左右を持ち替えるように支援した。リコーダーの演奏が始まると、笑顔で頭を左右に振ったり、足を不規則に曲げ

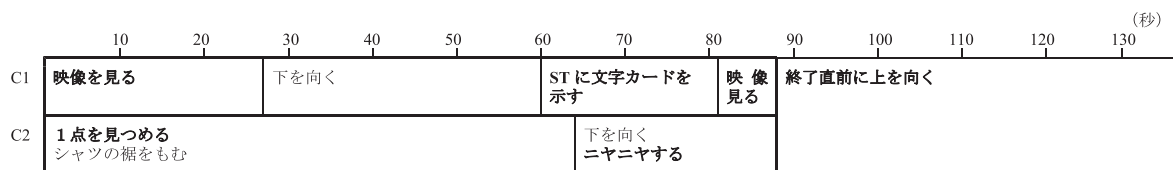


図2 “4羽の白鳥の踊り”における生徒の反応

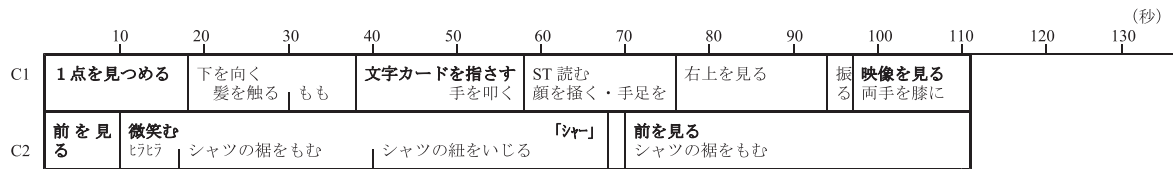


図3 “騎士たちの踊り”における生徒の反応

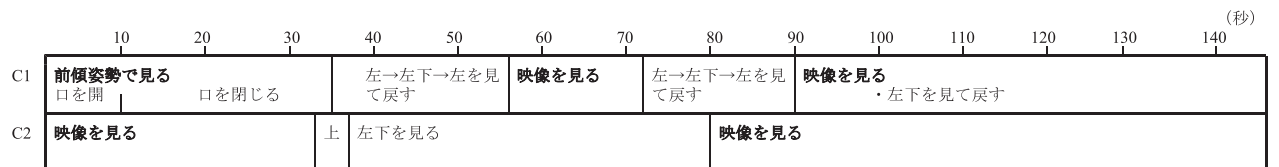


図4 “金平糖の踊り”における生徒の反応

伸ばしたり、バチでブロックを叩いたりした。2番の歌詞で、STを見たり、バチでSTの方を指したり、後ろを見たり、バチとブロックを叩き合わせたりした。最後は、バチでブロックを打っていた(図8)。

(2) C2の反応

最初、右手でブロック、左手でバチを持ち、細かい音で叩き続け、ブロックをクルクル回した。曲が始まるとバチでブロックを打つが、ブロックの柄を持ってクルクルと回す姿がみられた。途中、隣にいるC1の動きを数秒間見ていた。リコーダーが旋律ではなく、刻みのパートを吹くと、そのリズムに合わせてブロックを金槌のように振っていた。終わってから「ガーガガ」と歌っていた(図8)。

2 MTへの聞き取り

1) 知的障害教育における音楽鑑賞のねらい

小学部1段階のねらいにあるように「様々な音楽に親しむ」ことを考え、好きな音楽をみつけることができるように考えている。そこで、幅広い音楽に親しむことができるように、クラシック曲を中心に音楽の授業で取り上げ、聞き覚えのある曲かどうかを観察し、繰り返し聞く機会を作っている。

2) 音楽的な感受や思考・判断や理解し味わう能力

「音楽を味わって聴く」ことができているかわからないが、音楽を形づくっている要素のうち、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズなどは、感覚的にとらえることはできてい

ると考える。分析的に聞き取ることはできないが、音楽を聴くことに関しては、他の能力よりも高い能力を示していると考えられる。

C2は、聴いているときに感覚的にとられていることが多くあるが、その場では反応として表出することはなく、終わってからや教室に帰ってから、口ずさんだりすることがある。

3) 音楽的な体験をとおして音楽の意味を感じ、理解する

C1は、以前はオーシャンドラムを揺らす活動が精一杯であったが、マレットで打楽器をたたく活動ができ、しだいにマレットで速さ、強さを変えてたたけるようになっていた。また、曲の終わりがわかって、動きを止めることもできるようになった。現在は、床に座って太鼓をたたくことで、安定して音楽を聴きながらたたくことができるようになっていた。

C2は、以前は楽器をたたいても10秒と持続しなかったが、現在では長くたたいたり、337拍子のリズムでたたいたり、音程のある木琴を好んでたたいたりするようになった。

4) 「みる・きく」ことでイメージをもつきっかけとなる

以前は、ディズニー映画の「ファンタジア」やミュージカルの映像と音楽を鑑賞していた。音楽のリズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズと映像が重なっているものには集中して聴いている傾向があるようだ。たとえば、「ファンタジア」の「ラブソディ・イン・ブルー」は集中してよく聴いていた。ウィーン・フィルのニュー・イヤー・コンサートでの「ラデッキー行進曲」、リストのピアノ協奏曲第1番の第1楽章、映像な

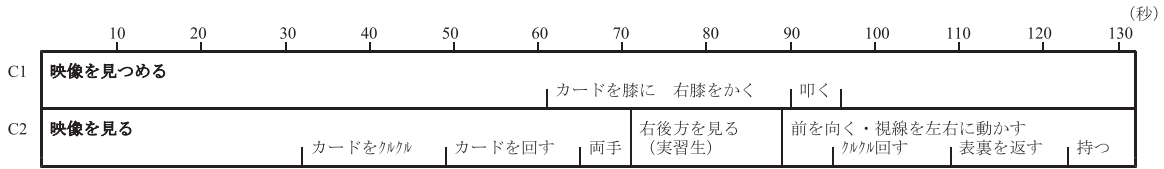


図5 “赤鬼と青鬼のタンゴ”における生徒の反応

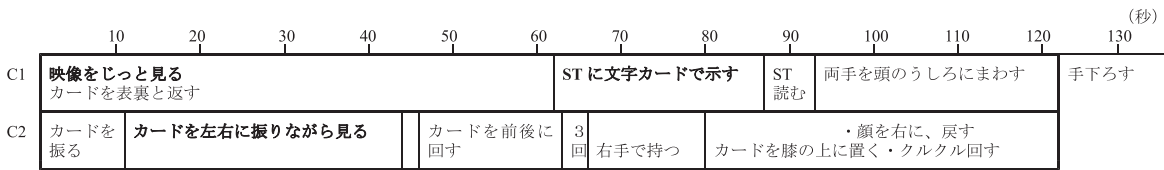


図6 “フニクリ・フニクラ”における生徒の反応

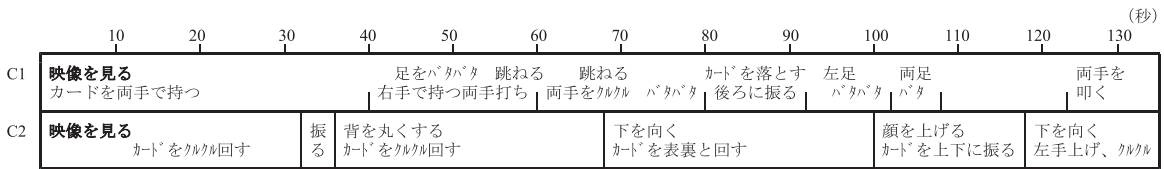


図7 “大きな古時計”における生徒の反応

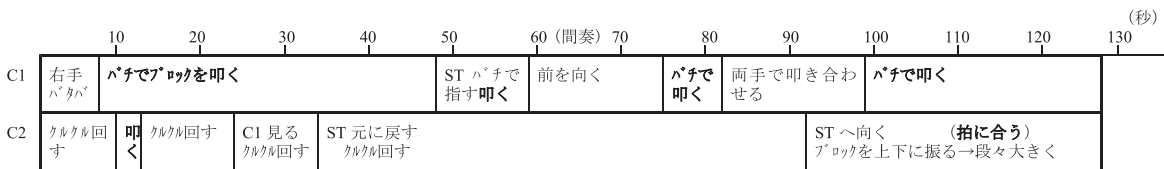


図8 生演奏による“大きな古時計”における生徒の反応

しのトスカニーニ指揮のバーバー作曲「弦楽のためのアダージョ」(CDによる)を集中して聴いていた。

C2は、家でテレビを見ていても、5分以上見続けることができない。すぐにチャンネルを変えてしまう。それが、音楽の鑑賞の授業では、5分以上見て聴くことができている。

5) 音楽鑑賞の教材

C1は、“フニクリ・フニクラ”を「鬼のパンツ」の曲だと訴え、前時の“赤鬼と青鬼のタンゴ”と鬼つながりだったことを喜んでた。DVDでオペラ・バレエ曲を演技と音楽と一緒に鑑賞することについては、どれも集中して聴いていた。また、C1はチャイコフスキー作曲「白鳥の湖」より“4羽の白鳥の踊り”の途中で、文字カードによって「べばりぜ」(市販薬の名称)と教えてくれた。葉のコマーシャルで聴いたことがあると訴えてきた。また、NHK「みんなのうた」より“赤鬼と青鬼のタンゴ”“フニクリ・フニクラ”“大きな古時計”はよく知っている曲なので、集中して聴くことができている。

IV 考察

1 生徒の反応

1) C1

C1は、鑑賞中、既学習・未学習、メロディーラインやリズムのわかりやすさにかかわらず、動きが少なく、視線が一点に集中していることも多かった。特に、曲の始めと終わり、急に楽器が変わる場面、既習曲の場合、視線を映像の方に向けていた。視線が映像以外に向けられていても、流れている音楽に意識が向けられ、音楽をよく聴いていることがわかった。

MTへの聞き取りからは、C1・C2ともに曲の終始、速度、強弱、拍の流れやフレーズなどは、感覚的にとらえることはできており、音楽を聴くことに関しては、繰り返し聴くことにより、感覚的にとらえ、聴いたことがあるという楽曲をいくつかもっていると考えられる。

たとえば、C1はチャイコフスキー作曲“4羽の白鳥の踊り”をDVDで鑑賞したときに、途中で文字カードを取り出し、葉のコマーシャルで聴いたことがあると訴えていた。また、“フニクリ・フニクラ”を「鬼のパンツ」の曲だと訴え、前時の「赤鬼と青鬼のタンゴ」と鬼つながりだったことを喜んでたとMTは述べていた。

2) C2

C2は、既習曲においてリズムに合わせて身体や腕を揺らす、腕を前後に振る・拍を取る姿が多くみられた。逆に、体を動かさずに集中し、聴き続ける姿もみられた。

バレエ“騎士たちの踊り”では、開始後1分が過ぎた頃、鑑賞の曲とは直接関係ない発声「シャー」とポーズを行っていた。これは寄宿舎のことで、鑑賞中に寄宿舎のことを思い出したのではないかと推察できる。終了後、「ガーガガガ」と曲を口ずさむ姿もみられた。何の曲か聞き取れなかったが、鑑賞後、好きな曲を思い出したようである。

両手あるいは片手で自分の服の裾を握る、紐を引くことも多く見られたが、音楽は集中して聴いていた。一種の常同行動と考えられるが、絵カードやウッドブロックを持っているとき、バレエ“金平糖の踊り”を鑑賞しているときには見られなかった。物を持っていることと鑑賞曲の違いが影響したと考えられ

るが、それ以上のことは見とれなかった。

さらに数多く鑑賞する機会を作ったり、動作を加えたりすることによって、変化がみられる可能性もある。

2 音楽鑑賞の教材と提示方法

MTは、生徒が様々な音楽に親しむことを考え、好きな音楽をみつけることができるように、クラシック曲を中心に音楽の授業で取り上げ、繰り返し聴く機会を作っている。また、聞き覚えのある曲を引き出していくことも行ってきたという。対象とした生徒は、テレビ等で好きな音楽をみつけ、C1は知っていることを文字カードで訴えてきたり、C2は口ずさんだりしている。それらは、クラシック曲もあるし、アニメの音楽でもあるし、学校で覚えた歌でもある。また、MTは、生徒は「音楽付きの映像に集中して音楽を鑑賞することができる」といっている。

また、映像付きの音楽として、バレエの一場面をDVDで鑑賞した。近年、クラシック曲がコマーシャルで使われることもあり、コマーシャル好きなC1は、聴いたことがある曲として文字カードで訴えてきた場面が2回あった。

そして、観賞教材の内容を示す写真カードや絵カード(ペープサート)を用いた。絵カードを手にとり振ったり、積極的な反応を見ることができた。打楽器を叩く活動も、興味・関心や意欲を高めることができたのではないかと考える。音楽を聴いて打楽器をたたいて反応する活動をとおして、打楽器をたたく活動そのものも充実し、観賞との相乗効果があったと考えることもできる。

3 知的障害児を対象にした鑑賞指導

今回の対象は、特別支援学校中学部重複学級の2名で、知的障害の診断があり、始歩が遅く、排泄の自立がむずかしい状態にあり、歩行等も不安定な身体的特徴がある。発声・発語、サイン、文字などコミュニケーション手段も限られており、こだわりが強く、障害の程度も重度であった。しかし、音楽が好きであり、音楽の終始や速度、強度などの違いを感じ取ることができていたと考える。また、経験したことやあるイメージを想起することもできていた。

音楽の要素を聴き取るだけでなく、DVDによって聴覚と視覚を合わせて鑑賞することで、映像を注視したり、音楽と動きのリズムに合わせて絵カードを振ったりする反応がみられた。このことから、知的障害児を対象とした音楽鑑賞を成立させる構成要素として、聴覚的情報と視覚的情報の関連性について、特に、音楽と動きが一致したバレエなどの鑑賞教材に関して、さらに詳細な検討が必要だと考える。

また、DVDによる音楽鑑賞では、生の演奏による身体的な反応や実際の演奏体験などの運動的な側面との関連で十分に検討することができなかった。対象生徒に運動面の制約が若干あったことも影響したが、神原(2007)がいうようには子どもたちができる動きを導入した実践をさらに検討できたらよかったのではないかと考える。音楽鑑賞における全身的な身体運動による反応に関する検討も、知的障害児の音楽鑑賞を成立させる重要な要因となるので、今後の課題としたい。

知的障害児を対象に実際に音楽鑑賞の指導を行ったが、どのように音楽を聴いたのか、どのように感じたのか、自分からの意思表示が限られているために、反応の記録から読み取ろうと

したが、むずかしいところがあった。その点で、MTからの聞き取りは貴重なものであった。MTから様々な情報を得ることによって、どのように音楽を聴いているのかを想像できることもできた。

2人の生徒は、遊び歌などでも、何回も何ヶ月も繰り返しやって、やっと動きが出てくるといった状態であるという。音楽鑑賞でも同様で、子どもたちの実態や興味・関心、音楽鑑賞を集中して行う能力を信じ、これらの点に配慮した鑑賞指導を幅広く構想し、繰り返し展開していくことが必要だと考える。さらに、この曲のこういうところを聴いてほしいというメッセージを視覚情報も加えながら伝えるとともに、もっと聴きたいと思えるような完成度の高い楽曲を探していくことも重要であり、今後の課題としたい。

文 献

神原雅之編著（2007）アクション&ビートでつくる音楽鑑賞の授業。明治図書。

前明子・緒方茂樹（2007）音楽を活用した教育実践のための基礎的研究。音楽鑑賞に関わる心理的「構え」と脳波変動。琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要。8, 69-77.

文部科学省（2008）小学校学習指導要領。東京書籍。

文部科学省（2009）特別支援学校学習指導要領解説総則編等（幼稚部・小学部・中学部）。教育出版。

文部科学省（2011）おんがく☆おんがく☆☆おんがく☆☆☆教科書解説。東京書籍。

小原有貴（2009）知的障害児のある児童の音楽教育において「きく・みる力」を豊かにするために必要な視点—小学部（知的障害）3年生の生活科におけるおんがく遊びの実践を手がかりに—。学校音楽教育研究, 13, 89-90.

高須一（2009）新しい学習指導要領で求められる鑑賞教育とは。坪能克裕・坪能由紀子・高須一・熊木眞實子・中島寿・高倉弘光・駒久美子・味府美香（2009）鑑賞の授業づくりアイデア集へ～そ～なの！音楽の仕組み。音楽之友社, 6-10.